



はじめに——文学を「オワコン」化しないために

今回から近代文学作品を対象に、現代にもつながる「読み」の提案を試みていきたい。実は、平成三十(二〇一八)年四月から「じわじわ効いてくる近代文学」というリレー形式のエッセイにペンネームで参加しているのだが、四人の執筆者が持ち回りで近代の文学作品を一つ取り上げ、独自の視点から語るこの企画も、はや五十回に達し、筆者の扱った作品も十六作品となった。^①「女子たち」の連載を終えたこの機会に、せっかくの「文学の種」を更に考察し、評論として育ててみようと思った次第だ。

作品は現代にもつながるモチーフを有している(と筆者は思っている)ものに絞っている。さらにこのシリーズ

では、現代にも通用する方法で、これら近代の作品を語ることができるとか、という無謀な挑戦が企まれている。

二〇〇〇年代に入り、柄谷行人の「近代文学の終り」と題した講演が象徴的だが、文学および文学研究は「オワコン」(終了したコンテンツ)扱いされて久しい。^②だが、中国新聞出版研究院が二〇二三年に実施した「全国国民読書調査(第二十回)」によれば、実際の読書時間は、コロナ禍の「オウチ時間」を経て、オーディオブックや動画での視聴など、形態が多様化しながらも上向いているという。ならば人々がまだ「読む」ことと「言葉」とを手放していない今、文学サイドから近代作品の面白さをプッシュしてみたいのである。

一、「蜘蛛の糸」——現代も根強いオワコン的解釈の原因

前置きが長くなったが、第一回で取り上げるのは、エッセイ初回でも扱った芥川龍之介「蜘蛛の糸」である。^③すでに何度か研究で取り上げたことがあるため、細かい描写の解釈ではなく、新しく気付いた点を考察に取り込むことで作品のアップデートを図りたい。

「蜘蛛の糸」の掲載誌は、大正七(一九一八)年七月一日に創刊した鈴木三重吉主幹の児童雑誌「赤い鳥」である。まず、児童文学としての依頼原稿だったという点に留意し

ておきたい。現代においても、「蜘蛛の糸」は中学校の教科書や副教材などで採択されているものの、児童文学雑誌という掲載誌の性格から、教育的観点が入り込んだことで、その評価が揺れているのが現状だ。文学と教育という両者の読みの摩擦は、教科書における「文学×教育」のコラボレーションにおいて考えるべきポイントだろう。

たとえば、「蜘蛛の糸」否定派の嚆矢として知られているのは、児童文学者と児童文学作家の顔を併せ持つ古田足日^{ふるとるひ}だ。古田は、「『くもの糸』は名作か」なる挑発的なタイトルで、児童文学の観点から「二流の読物」と酷評したことで各界を驚かせた⁴。その批評では、「児童文学の近代化の過程のひとつとして、民話・説話との対決という過程がある」と重要な要素が指摘されているものの、作品自体の評価としては「勧善懲悪、既成のモラルを鼓吹するものでしかない」と、説話との対決に「蜘蛛の糸」は敗北したと読んでいる。一方で、作品の「文学的な部分」を支える「アンチ・ヒューマニズムの思想」は、「子どもとは無縁のものではなからうか」と首をかしげてみせてもいる。

この、説話形式を「古い」と言い、内容を「子ども向けには暗い」と言うネガティブな評価は、逆説的に作品が孕む読みの多層性に気付かせてくれる。おそらく、「蜘蛛の糸」は、説話的な話型と児童文学的な内容の枠組みという

二重のフィルターにより、読み手の固定観念や道德的規準に誘導された末の誤読が起こりやすくなっている。「人間のエゴイズム」を作品の主題と捉え、「子ども向けの作品に人間不信はおよそふさわしいテーマとは思えず」（滝藤満義）といった評価も同様だろう⁵。まずはこの厄介なフィルターを理解し、それを突破することで、「蜘蛛の糸」の読みをアップデートしていきたい。

二、大正期児童文学運動と、まとめられた「子ども」

本来、読書は自由な行為なので、フィルターを通す読みが悪いというわけではない。しかし、作品評価において、「子どもにとつての良い読み物」という条件を置くことは、危うい。この危険性については、「赤い鳥」を必然的に産み落とした大正期の児童文学運動が、後世で問われるべきところである。ここで少し当時の「赤い鳥」の時代的な立ち位置について触れておきたい。

大正七年七月に創刊された児童文学雑誌「赤い鳥」は、子どもの為に書き下ろす文学をコンセプトに、谷崎潤一郎、正宗白鳥、与謝野晶子など錚々たる作家達が執筆者に連なっている、やがてその活動はデモクラシーの波を受けて、一大児童文学運動となった。しかし一見、民主主義的かつ平等にみえるこの運動は、致命的な欠陥を抱えていたよう